

東都



金華本

日本



藏書印鑒

● 林申清

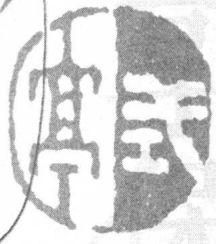
編著

● 北京圖書館出版社

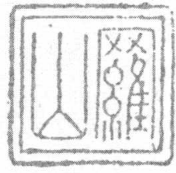


J2
L6

J292.47
L625



東都

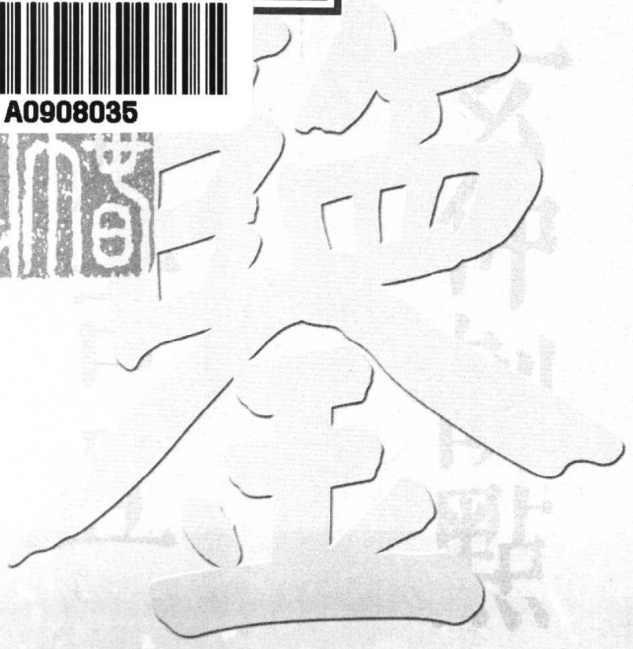


日本
藏書印鑑

● 林申清 編著
東京圖書館出版社



A0908035



圖書在版編目(CIP)數據

日本藏書印鑒/林申清編著. —北京:北京圖書館出版社, 2000. 10

ISBN 7-5013-1073-4

I. 日… II. 林… III. 藏書-印章-日本
IV. J292.47

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2000)第 70884 號

書名 日本藏書印鑒

著者 林申清 編著

出版 北京圖書館出版社(原書目文獻出版社)

發行 (100034 北京西城區文津街 7 號)

經銷 新華書店

印刷 北京市安泰印刷廠

開本 787×1092 毫米 1/16

印張 11.6

版次 2000 年 10 月第 1 版 2000 年 10 月第 1 次印刷

印數 1—3000

書號 ISBN 7-5013-1073-4 / K·169

定價 36 圓

序（日文）

漢籍が初め日本に到来したのは遅く、おそらく四世紀の後期か五世紀の前期のことと思われる。藏書印は八世紀になってようやく出現し、光明皇后（聖武天皇妃）の二印が現存する。『積善藤家』印と『内家私印』印で、前者は正倉院御物（杜家立成雜書要略）に、後者は唐寫本（禮記子本疏義）（ともに佚存書）等に見られる。平安鎌倉時代には仏教經典が頻りに書写され、またその刊刻も始ったから、諸所の神社仏閣の收藏印が多數残されている。平安の貴族の間には和歌という文學が発達したが、かれらは漢籍をも愛好したから、すでに十二世紀前半には『太平御覽』をはじめ宋刊本を所有していたと傳えられる。個人の藏書が形成されたのはこのころからと考えられるが、藏書印は僅かしか現存しない。

武士の時代に入って、東國にその學問教養の機關として、金沢文庫や足利學校が創設され、公印が捺されて、所藏の書籍は學者學生の閱覽に供された（本書『附・官、公（特）藏』參照）。室町時代には京都の五山を中心に公私（寺院、僧侶等）の藏印が増え、江戸時代にごく一般的に用いられ

る。

林申清先生は先に《明清藏書家印鑑》を撰し、これを大きく増補して《中國藏書家印鑑》を編まれた。私は版本研究者として北京、上海、南京、臺北そして日本各地所在の多數の古籍善本を調査し、解題を誌してきた。その際にこの兩著の恩恵をどれだけ蒙ったか、量り知れないものがある。先生が此のたび日本の藏書家の印鑑集を編纂、出版されるという。日本は古來、文化のあらゆる分野に亘って、きわめて多くのことを主として漢籍を通じて學んできた。藏書印はこのような日本の中國文化受容および展開の過程や実態を一面から示すものである。一方、近世以降、日本の古寫本や刊本が多數中國に齎され、《中國館藏和刻本漢籍書目》《中國館藏日人漢文書目》（王寶平等編）のような目録も刊行されている。これらの書籍にも藏印か捺され、同じ事情を物語る。林先生の好著が右に述べたようなことがらについて、中國の讀者の理解を深めることが期待され、日本人としてこの上なく喜びに堪えない。

尾崎 康

一九九九年二月

序(中文)

漢籍初傳日本，最遲當不晚於四世紀末，五世紀初時，但日本的藏書印一直到八世紀時才出現。現存最早的藏印當數光明皇后(聖武天皇妃)的『積善藤家』和『内家私印』二印，前者見於正倉御物《杜家立成雜書要略》*，后者見於唐寫本《禮記子本疏義》(二者均為佚存書)等。平安鎌倉時代，盛行抄寫佛教經典，佛經的刊刻亦始於此時，故現今可見各神社佛閣的收藏印甚多；當時，平安朝的貴族之間雖多流行『和歌』這一文學形式，然這些貴族同時也都酷好漢籍，故在十二世紀前半葉時日本已有了《太平御覽》等宋刊本，私人藏書大約也形成於此時，惟藏書印可考者甚少。

進入武士時代，日本曾創設了金澤文庫、足利學校等作為學術研究和文化教育的機構，這些機構在所藏的書籍上，多鈐有公印，供學者和學生閱覽(參見本書『附：官、公(特)藏』部分)。室町時代，以京都的五山為中心，公、私(寺院、僧侶等)藏印日增，至江戶時，藏書印已漸普遍使用。

林申清先生曾編有《明清藏書家印鑒》，以後又增補為《中國藏書家印鑒》。我作為版本研究者，曾赴北京、上海、南京、臺北以及日本各地遍訪古籍善本，撰寫書目解題，其間受惠於二書，增廣見聞者甚多；這次，林先生又編成了《日本藏書印鑒》。自古以來，日本在文化領域的各個方面，很大程度

上主要是通過漢籍來學習各種知識，故藏書印可從一個側面展示日本接受、推廣中國文化的過程和實態；另一方面，近代以降，日本的許多古寫本、古刊本也傳到了中國，現已出版有《中國館藏和刻本漢籍書目》、《中國館藏日人漢文書目》（王寶平編）等目錄。在這些傳到中國的書籍中，又都鈐有日本的藏書印，展示了日中文化的雙向交流。林先生的編著經過所述如右，希望本文能够加深中國讀者對此書的理解，作為一個日本人，我對此書的面世感到萬分的欣慰。

尾崎 康

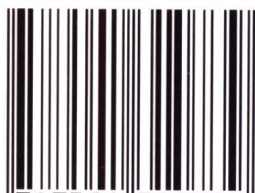
一九九九年二月

* 注：《杜家立成雜書要略》為光明皇后御筆手抄六朝尺牘彙編，今國內不存。

細川十洲曰天文板論語和泉人所刻。
而藏于和泉古剎者三百八十餘年。
吾兄久奉圓珠經。今作其跋。亦和泉
人。豈非佛家所謂回緣者也耶。



ISBN 7-5013-1073-4



9 787501 310739 >

古今通纂卷一百一十五
正四十一九二五十三

古今通纂卷一百一十五

南北經緯覽曰大成鈔卷一 意安宗伯
此書始錄元陽所著也名賢為文江太守杜
九仁宗仁宗朝十四主第八主也
聖文欽聖皇帝即位明中興敗元皇
廟號從日本後醍醐天皇應之也熊宗立
聖學源流曰孫元賢文江入元仁宗延祐中
選賢方集成于先祖及明今休選宣明教粹
等方而附益之是謂覽方大成
丁本南北上新編或類編二字有之
南北丁說江南江北也文那丁天下指也
又古語陽陽之義也昔非也點對南者合

目錄

序(日文)		一
序(中文)		三
八條家		一
土肥慶藏		三
大田覃		四
大谷木季純		五
大澤基季		六
大橋正順		七
小寺廣路		八
小杉楳邨		九
小宮山昌秀		一〇
小野節		一一
木村孔恭		一二
五弓久文		一四
中川忠英		一五
内藤賴長		一六
水野忠央		一七
水野忠邦		一九
毛利高標		二〇
今泉雄作		二二
石川豐翠軒		二三
石井至穀		二四
石塚豐芥子		二五
平田篤胤		二六
本多忠憲		二七
甘露寺家		二八
北川政武		三一



北川真顔		三二	多紀元堅		五五
田澤宗伯		三三	坊城家		五八
仙石政固		三四	村井敬義		六二
白井光太郎		三六	町田久成		六三
市河寬齋		三七	足代弘訓		六四
市橋長昭		三八	伴直方		六五
立原翠軒		四〇	伴信友		六六
加藤千陰		四一	近藤守重		六七
加藤昶		四二	青山延于		六九
吉田意庵		四三	青木敦書		七〇
朽木綱泰		四四	青柳文藏		七一
曲直瀬正琳		四五	長島尉信		七二
竹川政胖		四六	長野主膳		七三
竹村茂雄		四七	林信勝		七四
伊藤圭介		四八	林 恕		七五
向山榮		四九	林 靖		七七
多紀元簡		五〇	林 衡		七八
多紀元胤		五三	松木家		八一

松平定信		八四
松平忠房		八六
松浦静山		八七
板蒼勝明		八八
東條信耕		八九
岸本大隅		九〇
岩本覺		九一
岩崎常正		九二
河村秀根		九三
春木家		九四
狩谷望之		九七
宮崎成身		九八
屋代弘賢		九九
根岸武香		一〇〇
柴野邦彦		一〇一
高橋景保		一〇二
脇坂安元		一〇三
堀直格		一〇四

荻生徂徠		一〇五
島田翰		一〇六
清水濱臣		一〇七
淺野長祚		一〇八
洩江全善		一〇九
喜多村信節		一一〇
菊地久徳		一一一
野口道直		一一二
野間成大		一一三
間宮士信		一一四
富士川游		一一五
渡邊定静		一一六
萩原乙彦		一一七
塙保己一		一一八
新井白石		一一九
新見正路		一二〇
新庄道雄		一二一
鈴木成恭		一二二

駒井乘村	一二三
橫山由清	一二四
德川義直	一二五
稻葉正謀	一二六
齋藤幸成	一二七
館機	一二八
檜垣家	一二九
藤原惺窩	一三三
附：官藏・公（特）藏	
釋迦文院	一三四
足利文庫	一三五
金澤文庫	一三六
紅葉山文庫	一三七
醫學館	一四〇
和學講談所	一四二

昌平坂學問所（一）	一四三
昌平坂學問所（二）	一四五
蕃書調所（開成所）	一四六
書籍館（淺草文庫）	一四七
大學校・大學	一四八
醫學校・大學東校	一四九
東京書籍館・東京府書籍館	一五〇
東京圖書館・帝國圖書館	一五一
太政官文庫・內閣文庫	一五四
靜嘉堂文庫	一五六
印主姓名筆畫索引	一
印文四角號碼索引	四
編輯說明	一

八條家 八條家本姓藤原，為四條家的分支，及櫛笥隆英於享保年間起始稱八條家。隆英著有《裝束類纂》，其曾孫隆祐著有《群書服飾拔英》。累代皆好學之士。



隆英之章



隆英之印



八條圖書之印

八條



八條藏書



土肥慶藏 (1866 - 1931) 號鶚軒。醫學博士。喜藏書，且多漢籍。有《鶚軒文庫藏書目錄》(和漢書分類目錄)傳世。



土肥慶藏之印



鶚軒文庫



鶚軒所獲

大田章 (1749-1823) 字子粗，號南畝，通稱直次郎，別號四方赤良、蜀山人等。江戸時狂歌師，著有《蜀山百首》、《二話一言》等。



南畝



大田氏藏書



蜀山人



南畝文庫